

新刊紹介

クラウディア・ゴールディン 著（鹿田昌美 訳）
『なぜ男女の賃金に格差があるのか—女性の生き方の経済学』
慶應義塾大学出版会，2023年

横山 真紀*

100年以上前の米国において，大学を卒業した数少ない女性が仕事を続けたいと考えた場合，結婚や家庭を諦めざるを得なかった。現在は，女性が学歴を求めることが当たり前になり，パートナーや子どもを持ちながらキャリアを追求することができるようになった。その変化はなぜ，どのように起こったのか。そして，今なお残る男女の賃金格差の要因は何か。原題「Career and Family: Women's Century-Long Journey toward Equity」が示すように，本書のテーマは「キャリアと家庭」の両立である。著者は，ハーバード大学経済学部で女性として初めて終身在職権（テニユア）を得たクラウディア・ゴールディンであり，本書は，彼女の数十年に渡る研究成果が凝縮された一冊である。

第1，2章は本書の導入部にあたり，問題提起，分析の概要についての説明である。本書の分析対象は1878～1978年に生まれた女性だが，特に大学卒以上の高学歴女性に着目している。100年間で5つの世代に分け，それぞれの世代の女性が直面した職業上，家庭上の制約や障壁，歴史的な転換点（大恐慌，世界大戦，ピルの普及等）が女性の社会進出やライフイベントにどのような影響を及ぼしたのか。後続の世代が前の世代から学ぶことを，著者は「バトン」と表現しているが，世代から世代へどのようなバトンが渡されたのか。続く第3章～第7章において，1つの世代につき1章を割り，データを用いた丁寧でダイナミックな分析が行われる。

改めて強調したいのは，本書の題材は「キャリアと家庭」の両立であり，「仕事と家庭」の両立ではないことである。ここで用いられる「キャリア」とは，単に雇用されているという意味ではなく，「長く働いて，人気のある職種であり，（…）それが自分のアイデンティティを作ることが多い」（27頁）。対照的に「仕事（ジョブ）」は，「一般的に自分のアイデンティティや人生の目的の一部にはならず，収入を生み出すだけのものである」（27頁）。

「キャリア」と「仕事」が明確に区別されていることを念頭に，5つの世代につけられた名前を改めて見ると興味深い。第1世代「家庭かキャリアか」（1878年～1897年生）にこそ「キャリア」の語が入っているが，著者も本文中に言及するように，第1世代の女性の多くは「キャリアではなく複数のジョブをつないでいた」（32-33頁）。第1世代の女性は，結婚し家庭を持つか，そうでなければ自分で自分を養うか，二者択一の世界に生きた。その後第2世代「仕事のあとに家庭」（1898～1923年生），第3世代「家庭のあとに仕事」（1924～1943年生）と，家庭は持つが生涯にわたるキャリアを持たない世代が続く。第4世代「キャリアのあとに家庭」（1944～1957年生まれ）は，ピルの登場にも後押しされ，大勢がキャリアと家庭を持てるようになった最初の世代となるが，この世代は出産を後回しにしたため，結果的に出生率が大幅に低下した。第5世代「キャリアも家庭も」（1958～1978年生まれ）は，生殖補助医療の発達に

* 国立社会保障・人口問題研究所 企画部研究員

より、キャリアと家庭の両方を手にする可能性がこれまでになく高まった。第5世代は現在進行形でバトンをつないでおり、リレーはまだ終わっていない。

第8章～第10章にかけて、今日の賃金格差の実態に迫る。男女の賃金格差の主な要因は、差別や女性の交渉能力の低さなどではなく、「貪欲な仕事」に多くの報酬が支払われるシステムの問題である、と著者は主張する。「貪欲な仕事」とは、労働者の時間を大量に要求する仕事のことであり、高収入をもたらす仕事の多くがその特徴を備えている。一方で、子育てにも時間を費やす必要がある。その結果、子どものいる共働き夫婦は、世帯収入の最大化のため、家庭内での分業を選択する。いつどんな仕事にも対応する高収入の仕事に就くか、家庭内の急なイベントに対応できる柔軟な仕事に就くか、夫婦で役割分担を行うのである。高収入の仕事を選択した親（多くの場合男性）は貴重な家族との時間を失い、柔軟な仕事を選択した親（多くの場合女性）は、潜在的に獲得できるはずの収入や昇進の可能性を大幅に犠牲にしなければならない。

この構造的な問題への対処法として、著者はいくつかの事例を提示している。その一つとして、米国の薬剤師を例に、薬剤師同士が互いに代替し合うことで、高度な専門性と高い賃金を維持しな

がら、同時に柔軟性を手に入れている様子を描写している。一方で、「単純な解決策も、万能の政策もない。」(282頁)とも述べており、あらゆる角度から取り組みを積み重ねる必要性を強調している。

この新刊紹介の原稿提出後に、著者のゴールドフィン氏が2023年のノーベル経済学賞（アルフレッド・ノーベル記念スウェーデン国立銀行経済学賞）を受賞したというニュースが報じられた。ハーバード大で開かれた受賞会見の中で氏は、日本の男女賃金格差について次のように語っている。日本は女性の労働力率は高いが、短時間労働が多く、正社員ではないことが多い。「女性を労働力として働かせるだけでは解決しない」。日本の女性の働き方は、本書で言うところの「仕事と家庭」の両立にとどまっており、「キャリアと家庭」が両立できるような施策が求められるということだろう。本書は、キャリアと家庭の両立について、多くの知見を与えてくれる。政策立案者や専門家だけでなく、家庭内での役割分担に悩んだことがある人、仕事を続けながら子どもを持つかどうかを考えている人、さまざまな立場の読者に手に取っていただきたい一冊である。

(よこやま・まき)

